石垣島・白保のサンゴ礁文化継承のとりくみを学ぶ　　担当：梶　裕史

２０２６年3月１２日～１６日　４泊５日

参加：７名（RSP 女子学生２，一般女子学生４，一般男子学生１）

【コースのねらい】

「サンゴ礁文化」とは何か、そしてそれを継承することにどのような意義があるのか――住民主体の持続的な地域づくりが行われている沖縄県石垣島の白保集落に滞在し、体験学習します。

日本最南の八重山諸島の主島・石垣島にある白保（しらほ）集落は、かつては「魚湧く海」と呼ばれた豊かなサンゴ礁の海に面し、背後には島で最大の農地が広がり、**田畑の豊かな成りものや海の恵みを暮らしに活かす「半農半漁」の自給自足的な生活文化**を築いてきた農村です。このサスティナブルな暮らしぶりが「サンゴ礁文化」です。一昔前は海に面した集落ならばどこでも見られた生活文化ですが、ライフスタイルの変化で失われていったところが多いなかで、白保は他地域に比べてその面影が豊かに残っています。白保住民は、1970 年代末からの海の埋め立てによる新空港建設計画をめぐる長年の苦難を乗り越え、21 世紀から、外部自然保護団体 WWF JAPAN が設立した組織「しらほサンゴ村」との協働により、伝統的な文化を守り伝えることが、「**命継ぎの海**」の保全にもコミュニティーの維持にも有効という考え方で、持続的な地域づくりを始めました。WWF は 2010 年代に住民の自立的な活動をめざす NPO 夏花の立ち上げを支援し、2020 年代初めには白保から引きあげて、現在は公民館主導のとりくみが続いています。白保でも昔に比べて生活は変わってきていますが、このような経緯で住民の自主的・組織的なとりくみが生まれたことにより、「サンゴ礁文化」の貴重なエコミュージアムとなっているのです。

このFS では、NPO 夏花のエコツーリズム的なプログラムや、滞在する民宿イラヨイでの食文化体験、優秀な海人（うみんちゅ）さんの船によるシュノーケリングなど、自然に寄り添う暮らしを大事にする「人」との交流を通じて、「健康で持続可能なライフスタイル」について、そしてそれを支える価値観・幸福感について、五感を生かして学び、考えます。

白保公民館 白保村公式HP ☞ https://sites.google.com/view/shiraho-official/home

NPO 夏花 ☞ https://natsupana.com/

【内容】

今回は天候に恵まれた 5 日間となりました。またメンバーは、コロナ後に再開した 2024 年から３年続けて、RSP のシニア女性と一般女子学生とのバランスよい構成となり（一般男子は 3 年連続１年生１人だけの「花園」(笑)）、世代を超えた好ましい交流が生まれています。

人生経験豊富なシニアおばさまは 20 歳前後の女子学生にとっては頼れるお母さんのような存在！　男子も１人ぼっちで寂しがらずに溶け込んでいました♪

（1）3 月 12 日

各自、石垣空港着 11 時台の航空便で来島し現地集合。

午後はかびら観光交通のバスをチャーターし、ガイド付きで**石垣島の概要を知るための島巡り**。白保から反時計回りで、人魚の像（車窓）→玉取崎展望台〈写真３〉→野底マーペー（車窓）→吹通川のマングローブ〈写真４〉→米原椰子群落〈写真５〉→川平湾〈写真６〉→名蔵アンパル（ラムサール条約登録湿地：車窓）→バンナ岳展望台→白保。

ガイドの女性は島の伝統文化に親しんで歴史もよく勉強している移住者の方で、白保にとっても転機となった明和の大津波（1771 年）にちなむ人魚伝説について子供向けに作った紙芝居を実演してくれたり〈写真１〉、伝統的な打楽器サンバで遊ばせてくれたり〈写真２〉、方言のミニ講座をしてくれたりと、質の高い島案内をしてくれました。

写真１

写真２

写真３

写真４

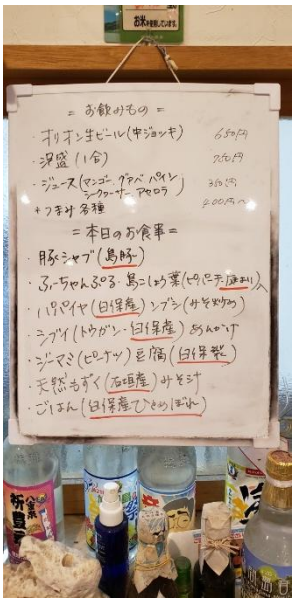
写真５

写真６

○民宿イラヨイ―伝統的な食文化を学べる食事が最大の魅力

さて、4 泊お世話になる民宿イラヨイは、約 15 年前に移住された大山左知（さち）さんが白保の男性・学（まなぶ）さんと結婚して開いたやどで、ここでオーナー左知さんが提供する夕食・朝食は、白保の自給自足的な食文化を、現代に合わせてアレンジして継承している、日本型エコツーリズムのお手本のような料理です。毎食が生きた伝統文化の学習になります。白保びとは、田畑の成りものや海の幸、そして庭に植えた植物や道のサンゴの石垣に生える野草、海岸の野草や海藻を採って、調理してきました。「**命草（ぬちぐさ）**」と呼ばれる、健康によく長寿をもたらす野草や海藻は、店で買うのではなく、身近に無料で手に入る食材です。

左知さんは移住後に村のおばぁ達から食べられる野草や調理の仕方を積極的に習い、毎日の献立に採り入れていきました。地産地消の料理は家計にも負担が少ないというメリットがあります。民宿イラヨイの食堂のホワイトボードに、毎食の献立と、何処で採った（仕入れた）ものかが書かれるのは、このやどの特色と言えるのですが、FS では美味しく頂きながら左知さんが親切に解説してくれます（写真は初日の夕食）。



見た目は地味に映るかもしれませんが、極めて栄養豊富でヘルシーです。沖縄料理屋で食べられるメニューもありますが、イラヨイの食事は身近な野草等の利用により、店よりバラエティに富んでいて、沖縄の伝統食でよく言われる「**医食同源**」「**身土不二**」を具現しています。

（2）3 月 13 日

〇集落散策―沖縄の伝統的な集落景観をゆっくり学ぶ

午前中は NPO 夏花プログラムの一つ、集落散策。案内は事務局の米盛拳（よねもりけん）さんという若手。白保集落は沖縄の伝統的な集落景観が石垣島では最もよく残る集落で、自主的に景観保全のとりくみもしています。赤瓦平屋の民家、サンゴの石垣、涼しい木陰をつくる防風林の福木並木、聖地御嶽（うたき）、明和の大津波にちなむ真謝（まじゃ）井戸、等々。拳さんは要所で、時を決めてそこで行われる伝統祭事のパネル写真を見せながら解説し、白保の 1 年の暮らしを伝えてくれます。

写真７，８は沖縄のどこの集落にも必ず１か所～数か所ある信仰の聖地「御嶽（うたき）」で、通常は観光客は入ることを控えねばならない場所ですが、地元の方の案内により特別に見学することが出来ます。鳥居で一礼して入場し、敬虔な気持で参拝します。

約 45 分の散策のあとは、梶が引き継いで追加の集落案内。

写真９・10 は沖縄の伝統的な集落景観を学べる白保の中で、私が象徴的な風景だと思う場所です。カンヌミチ（神の道）と呼ばれて自主的な修景も行われている大事な道の、或る場所。写真９の左側は築約 80 年の古民家で白保公民館指定文化財（写真 11）。サンゴの石垣とこんもりと涼しい木陰をつくる福木（ふくぎ）の防風林で囲まれています。右側は洒落た貸別荘（写真 10 は反対側から）。視覚的に不調和だなぁと思う人も多いかもしれませんね。しかし「景観」は見た目ではなく、可視の有形物を支える無形要素が大事です。八重山諸島で「古琉球の原風景」が今も息づく島として有名な竹富島の集落は、「重要伝統的建造物群」という国のまちなみの文化財であり、ほぼ写真 11 のようなスタイルの民家が続きますが、白保はまちなみの文化財ではなく、住民の自主的な取り組みにより落ち着いた佇まいが保たれています。現代的な建築であっても、白保の暮らしぶりに合っているならば、不調和ではない――と、以前は思っていました。しかし最近、見方が変わりました。2010 年代から、開発業者が集落の空地や空家を買収して食事処・宿泊施設などを新築またはリニューアルオープンするケースが増えており、特に一棟貸しの別荘タイプでは、オーナーが白保に居らず、客がリゾート気分で夜遅くまで騒いだり、泳いだあと裸で集落内を歩いたりという、住民の顰蹙を買う事態が発生しているといいます（写真９・10 の貸別荘にはプール有り）。白保はリゾートではなく、住民が昔ながらの静かな暮らしを望む集落です。苦情を言いたくてもオーナー不在で声が届かない。写真の貸別荘がそのような好ましくない一例なのかどうかは分かりません。見た目が伝統的な姿とミスマッチだから、ではなく、たとえ見た目は古民家のリニューアルによる新しい店であったとしても、その店がもし住民からは歓迎されないような営業をしているならば、それは「景観」をこわす物件なのです。

説明が長くなりましたが、白保集落が現在抱えているこのような課題を話したのち、写真９の奥、家なみが終わってさとうきび畑の中を少し歩いて辿り着く、カンヌミチの終点にある二つの大事な御嶽（波照間御嶽、多原（たばる）御嶽―写真 12）を鳥居から遥拝して、やどに戻りました。写真 12

は、「**何もないことの眩暈**（めまい）」――芸術家の岡本太郎が 1960 年代に沖縄の御嶽を訪ねた時の感動を表した名言を体感できる、白保で最も神聖感のある御嶽です。

〇赤土流出防止グリーンベルト植栽

午後は、NPO 夏花プログラムとして、赤土流出防止グリーンベルト植栽。サンゴ礁の大敵・赤土が畑から流れ出るのを少しでもブロックするため、農家に許可を得た畑の四隅に、フィルター効果のある植物を植えるという地道な活動を行なっています。代表的な植物が月桃（げっとう）で、今回は月桃約 200 株を、指示された場所に植えました。順調に成長してくれることを願って。

月桃は、葉が芳香を放ち防虫・抗菌・消臭効果があるため、古来、餅を包むのに使われたり、漢方薬になったり、茎は民芸品の材料になったりと万能の植物ですが、白保の新しいとりくみでは、伝統的な利用法にとどまらず、デオドランドスプレーを作ったり、補助金で機械を購入して月桃茶を作ったりして日曜市で販売しています。売上の一部は、植栽を許可してくれた農家に還元されます。ささやかでも利益が上がれば、グリーンベルトづくりに協力してくれる農家も増えて、結果的にサンゴ礁保全に役立つ、という循環型の地域経済を育てる試みが続けられています。

（↓NPO 夏花 HP より。籠も月桃。その右は植栽して十分に育った月桃グリーンベルト/月桃の花）

〇伝統文化継承に貢献する移住者

月桃植栽から戻ったあとは、やどの近く、「家カフェ」で休憩。このカフェは移住して 25 年余り、白保のサンゴ礁保全につながる活動を続ける夫妻が営む、自家で育てたハーブの品を提供する良質の店です。ハーブは料理の風味づけや薬用、香料、防虫などの効能がある野草を指し、先述のその一つですが、グアバ・長命草（ちょうめいぐさ）・カンパラ・ヨモギ・レモングラス・ハイビスカスほか、亜熱帯の石垣島はハーブの宝庫。白保の人々は伝統的に野草を食事によく採り入れて健康を保ってきました。いえカフェではそれらをブレンドしたハーブティーを作って、メニューとしているほか、日曜市でも販売しています。店内は亜熱帯の島らしく静かにくつろげる、大人の空間です。

そして夕方は民宿イラヨイで、左知さんに恒例の庭案内をお願いしました。白保の民家では、広い庭に観賞用というより食材など実用的な目的で様々な植物を植えてきました。左知さんは民宿の庭でその伝統を受け継ぎ、庭や近くの道端で採ったものをよく朝夕の食事に調理しています。

写真13

写真14

写真15

写真13.は八重山の島々で香辛料としてポピュラーなピパーツ（ピパーチ）を天日干ししている景で、ピパーツはサンゴの石垣によく自生しています(写真14.)。これもハーブですね。面白いのは、意識して植えたのではなくカラスが種を落としていってそこで育ったというケースも珍しくないこと。写真 15 はパパイヤで、沖縄ではフルーツというより野菜として食べるのですが、知らぬ間にそこに生えてきた、カラスの贈り物です（笑）　自生する野草や、カラスが運んできた種子から育った木を上手く生活に利用する。左知さんは移住して 15 年余り暮らすうちに、すっかり白保びとらしいライフスタイルに馴染んでいます。

移住者が営む家カフェも民宿イラヨイ（左写真）も、由緒あるカンヌミチ沿いにある現代建築ですが、白保の伝統文化を継承する暮らしを実践していることにより、白保らしい「景観」に溶け込んでいます。

「景観」は見た目だけではなく、無形の「中身」が大切、というのはこのような意味です。

Shiraho 家 cafe　https://shirahoiecafe-greensfarm.amebaownd.com/
民宿イラヨイ　https://www.facebook.com/irayoi2015/?locale=ja_JP
https://www.instagram.com/irayoi2015/

〇踊り体験教室―「ゆらてぃく」精神と「パーシャ」気質

夕食後は、NPO 夏花と梶の共同企画による「踊り体験教室」。白保は祭事に発する芸能が盛んな八重山でも特に芸達者が多い村として有名で、プロの歌者（うたしゃ）も多く輩出しています。祭事を大事にし、芸能好きな白保びとのパーソナリティーを表す「ゆらてぃく」という語があり、このプログラムは白保びとが大切にするゆらてぃく精神をひととき体験するねらいで採り入れました。

↑勤王流八重山舞踊 無錆の会 川井民枝会主のお弟子さん達による指導

白保の持続可能な地域づくりの指針を公民館が定めた「白保村ゆらてぃく憲章」の名前になっている「ゆらてぃく」とは、白保びとにとって国歌のような、豊年を予祝する「白保節（ぶし）」のリフレイン「**ゆらてぃく　ゆらてぃく　踊り遊ば**」という囃し詞に由来し、「さあ皆寄ってらっしゃい、楽しく踊り遊びましょう」という意味。白保は豊かな農村であるため、昔から**出身の異なる様々な来住者を寛容に受け入れる余裕があり、協調してよその新しい文化も採り入れつつ村づくり**をしてきました。ゆらてぃくはその歴史を表す言葉で、**皆で楽しく歌い踊ることは、親睦を深めて絆を強くするのに絶好**です。関連して、白保では、おだてるとノリがよくて皆を楽しませる人のことを**パーシャ**と呼びます。白保の人々は多かれ少なかれパーシャ気質を持っており、**ゲストも惹き入れて楽しい共有のひと時を創出するのが得意**です。

梶が師匠の先生と親交がある舞踊教室で催してくれた踊り体験では、伝統的な農民の踊りを演じるのに斧・鍬・鎌・笊や頬被り、上着を用意してくれ、簡単な振り付けで交互に踊って盛り上がり、八重山を代表する民謡である安里屋ユンタ（竹富島発祥の元歌を白保の人が現代風に編曲）も歌い踊って、「ゆらてぃく」の精神、パーシャ気質を肌身で体感しました。

（3）3月１４日

朝から夕方までは、NPO 夏花プログラムのハイライト、白保の「**稼業体験**」。白保はサンゴ礁が有名ですが基本的に農村であり、サンゴ礁の海（イノー）は、少数の海人（うみんちゅ。漁民）以外は農作業の合間の引き潮の時に出かけて「おかずとり」をする場でした。コロナ前は１泊の民泊が行われていましたが、今は日帰りでの体験です。参加者は３グループに分かれて、野菜農家、牛を育てる畜産農家、伝統的な染織を営む家、の３家庭にお世話になりました。農業体験先には環境に配慮した農業を営む家が選ばれ、コロナ前とは世代交代して、Ｕターンしてきた若手が受け入れてくれます。大地と天（天気）、生きものを相手にする農業や畜産はエコロジーを身体感覚で捉えて考えるのに絶好です。庭で材料を採って糸を績み、天然染料で染め、機織り具で手作業で織っていく伝統染織とともに、自然に寄り添う暮らしぶりの体験学習となります。

↑2 年前に東京からＵターンして野菜農家を継ぎ、農業による地域貢献をめざす美里春樹さん

↑和牛飼育農家の後継ぎ、近年肉の加工直販の「ぼーのファーム」も始めた宮良央（なか）さん

↓沖縄県指定無形文化財（八重山上布）保持者・松竹喜生子さんが主宰する伝統染織工房「なわた」にて

夜の**交流会**では、民宿イラヨイが料理を提供することになったため、参加者は夕方から会場のサンゴ村の厨房に入って調理を手伝いました。自分たちの手で一部料理したものも出して、稼業体験先の方々と会食するのは、踊り体験と同様に、良き「参与観察」となり、翌日の日曜市売り子体験とともに白保の食文化に親しみを増す機会になりました。

（4）３月１５日

４日目の日曜日午前中は私的な企画プログラムのハイライト、**日曜市**売り子体験。白保日曜市は、2000 年代に WWF しらほサンゴ村との協働で始まった「サンゴ礁文化」継承による持続的な地域づくりの取り組みの一つで、伝統的な食文化の掘り起こしを目的とした「**郷土料理研究会**」に端を発し、2005 年から開始されて、やがて毎週開催となった催しです。立ち上げの中心になったのは、前日の稼業体験でお世話になった宮良央さんの母・妙子さんで、自然に生かされる暮らしの尊さを伝えたいという願いがこめられています。2010 年代から NPO 夏花が運営し、日曜市運営組合から農産物等の出荷・出店を受け、野菜や料理、染織や民芸品など地場産品をサンゴ村で直売し、収益は地域へ

還元するという、6 次産業の優良事例となっています。

民宿イラヨイでも 2017 年から出店を始め、梶は 2021 年秋の、コロナ感染予防に配慮した短縮ゼミ合宿から訪問時に手伝いを試み、コロナ後に再開したＦＳでも、「売り子」体験を採り入れています。売り子をするためには当然、どんな品物なのか、どのような特色があるのか等に答えられるよう、左知さんから習って臨みます。参加学生は２グループに分かれてシフトを組み、売り子以外の時間は、他の出店を回って買い物をしたり対話をしたりと、白保の生活文化を実感できるひと時を過ごしました。

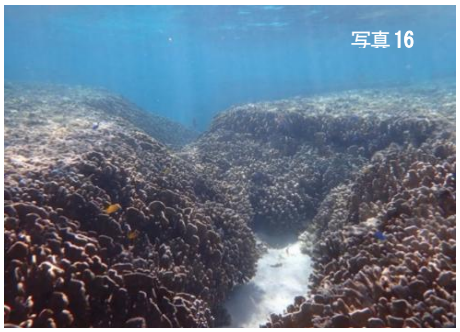
客の入りには波がありますが、ささやかに「販促」して売れると嬉しいものです。前日に美里家の稼業体験で 2 年女子 3 人が収穫したニンジンも出品され、完売！　午後のシュノーケリング準備のため、10 時スタートから約 2 時間のお手伝いで失礼し、イラヨイ出品の目玉である「カナッパ定食」

のお弁当を購入してやどで頂きました。「カナッパ」は月桃の葉のことで、かつては白保育ちの複数の年配女性たちの料理を組み合わせて大好評だった「カナッパ弁当」を、左知さんが夫の学さんと二人でも用意できるよう少し簡略化して、毎週出品しているのが「カナッパ定食」です。

○サンゴ礁シュノーケリング

本来は2日目（3／13）の午後の予定でしたが、風が強く波が少し高かったために、予備日としていたこの日に行われました。船で案内してくれるのは、白保一の海人だった父親の後を継いでいる新里昌央（しんざとまさお）さんで、稼業の漁以外でも白保で最も優秀な若手という定評がある方です。昌央さんは「白保魚湧く海保全協議会」のリーダーで、集落の外れの浜に計画された大型リゾート建設反対運動の先頭にも立って、奮闘して来られました。

この日は気温（・海水温）は低めだったもののほぼ快晴で、水中の透明度も抜群でした。そのおかげで、近年日本中で、夏の異常高温・海水温の上昇による白化現象が毎年のように起こり、サンゴがダメージを受け続けているなかで、（他所に比べれば）良い状態を保っている白保のサンゴ礁を、初めての学生たちは堪能することができたと思います（水中写真は新里昌央さん提供）。



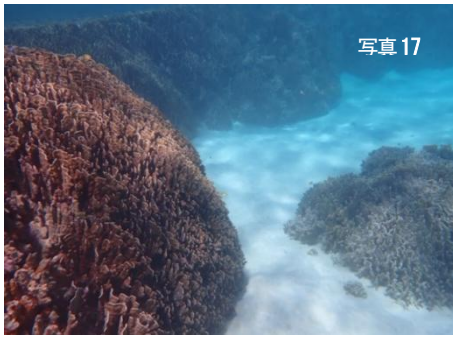


写真 16・17 は北半球最大級のアオサンゴ群落。18 は黄色いユビエダハマサンゴの見事な群体。19 のハマクマノミの背景は光線の加減で白っぽく見えますが、白化したサンゴではありません。写真 20 の奥に写っているように、サンゴが元気な場所は魚も多いです。白保のサンゴが他所と比べて元気な理由は様々考えられるのですが、新里昌央さんの見解では、もともとサンゴの生育には快適とはいえない環境で育ってきたので、ストレスに強い逞しさがあり、白化現象にも耐性があるのではないか、といいます。私はサンゴの専門家ではありませんが、趣味でシュノーケリングが大好きなために、定点観測しているような場所が他にもあり、中には 2016 年の世界的な白化現象で壊滅したあと、なかなか復活しない場所もあります。そういう場所はエダサンゴ系ばかり多いのに比べて、白保の海は 120 種以上もの多種多様なサンゴが生息しており、その多様性がレジリエンス（逆境からの回復力）になっているのではないかとも思ってきたのですが、現場に精通する昌央さんの見解は非常に新鮮で、傾聴に値します。

昌央さんは、ただサンゴについてガイドするだけではなく、世界的な海の危機や、自分が海人になった経緯、いま自分の使命と思うことなども、ユーモアをまじえつつ熱く語ってくれます。なかでも胸を打つのは「自分がやって楽しいと思うことでないと、長続きはしない」という言葉です。若い人がこの先自分のやりたいことを探していくうえで、金言だと思います。

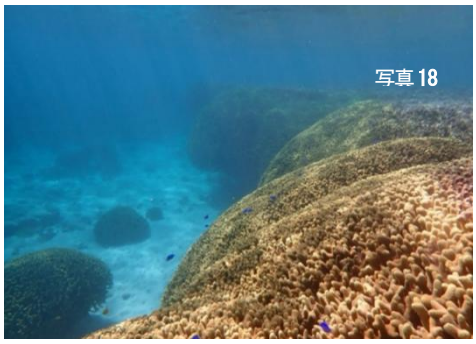


写真 18

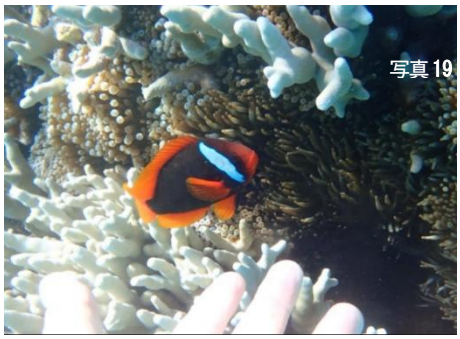


写真 19

写真 20

なお、白保のサンゴ礁シュノーケリングは、よその一般的なツアーに比べて約 3 倍の時間があり、ポイントを何か所か移動しつつ、少なくとも 1 時間以上は泳げて料金は他と同じ、しかもサンゴは未だ元気で魚も多いので、ここのシュノーケリングを経験するとよその大抵のツアーは物足りなく感じてしまうほど、お勧めです！

……最後の夜は、左知さんのレクチャーと、宿の名の由来である名歌「イラヨイ月夜浜」の学さんの熱唱で締めくくり、充実の 4 日間が無事終了。翌日は石垣市街に出て梶が石垣牛の定食を奢り（といっても安い昼食です　笑）、解散。めいめい市街地の店で買い物をして、帰路の便にあわせて空港へ向かいました。

4 泊 5 日と、白保の暮らしぶりをほんのひととき体験するに過ぎない短い滞在ですが、自然に寄り添い、大自然に生かされていることに感謝し、1 人ではなく助け合いによって生きていく幸せを五感で実感してもらうこと、そして私的には「お利口さん」のレポートを書くよりも、白保ファンになっていつかもう一度リピーターとして訪ねてほしい――これが企画者の願いであります。

（付録）イラヨイでは琉球犬を３匹飼っており、左知さん・学さんの負担を減らせるようにと、朝夕は学生有志で犬の散歩を行うことが推奨されます(^-^。特に朝は６時半頃には起きて眠たいのですが、集落の人と出会えて会話できたり、晴れの日は荘厳な日の出を拝めたりします（写真は「ニンゲー石」（＝海の彼方に祈願をする岩）と朝日）。また右下は2024年のFSで、日曜市の出品（アーサ汁）用に海岸で皆でアーサを採った時の一枚です。

【参加者の感想】　（学年は参加時）

☘今回、実際に白保を訪れることで、資料だけではわからない自然の恵みや人の温かさについて深く知ることができました。はじめの方は不安もありましたが、現地の白保の方々やメンバー、梶先生のおかげで楽しく白保について学ぶことができました。（1年　Y・G）

☘白保でのフィールドスタディを通して、自然や文化、人とのつながりの温かさを実際に感じることかでき、写真や資料だけではわからない学びを得ることができました。また、地域の方々との交流を通して、白保の魅力や課題について深く学ぶ貴重な経験となりました。（１年H・T）

☘今回の白保FSでは、濃密な石垣島白保村の文化を体験することが出来ました。生活の中に自然からの恵みが組み込まれており、特に「命継ぎの海」とのつながりを強く感じられました。今後の人生にも大きな影響を与えてくれたFSになったと感じました。（２年 K・S）

☘白保での暮らしに触れ、つながりが薄れつつある現代社会とは対照的な、人と人が支え合う温かさを学びました。滞在中に出会った人々のやさしさは、白保という地域の魅力そのものだと感じました。自然と人の温かさに包まれた日々は忘れられない経験となり、また必ず訪れたいという思いが強く残りました。（２年　W・S）

☘私はこのFSを通して、人のあたたかさをすごく感じました。普段住んでいる環境とは違って自然に囲まれた生活は、考え方によっては不便と感じてしまうかもしれませんが、ある意味不便だからこそ感じる人々の絆をすごく感じました。「海に行って、そこでアーサーのとり方を教えてもらったんだ。でも今はそんな人は少なくなってきている。」という左知さんの話をお聞きし、変わりゆく時代ではあるが、こういう人のあたたかさはずっと受け継がれていくものであるべきだとこのFS期間で強く感じました。（2年　Y．F）

☘白保FSでは昔から受け継がれてきた伝統の食事文化や、苧麻という植物からとった糸で紡ぐ八重山上布などすばらしい知恵と生きる力に触れ、守りたいものを伝え残すことの意味を考えることができました。また行きたくなるそんな場所です。（3年　A・S）

☘初の沖縄やシュノーケリング、犬の散歩などの初体験を楽しみながら、自然の中で人とつながる

暮らしを体験し、その価値を実感しました。現地の方と直接関われるFSならではの学びを得て、精神的な充足感とともに、このご縁を今後も大切にしたいです。（２年　Ｉ・Ｎ）